

# 来ぶらり7

## こんな図書館なら行ってみたい

—アンケートの結果から—

### 図書館利用にも男女の差

7月初旬に行った「大学図書館についてのアンケート」から、いくつかの結果を紹介します。

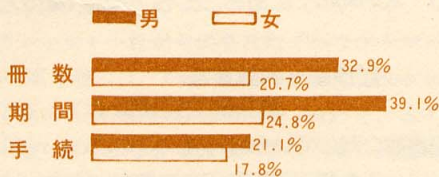
まず、「図書館へ行く回数」【図1】で、「ほとんど毎日」「週3～4日」という答えは男子に多く、「試験期のみ」が女子に多かったのは、ちょっと意外でした。男子の方が、比較的コンスタントに図書館を利用しているようです。一方、ここには結果を載せませんでしたが、「図書館へ行く主な目的は？」という質問では、「本を借りるため」「調べものをするため」という回答は、女子が男子を上回り、「時間つぶし」「待ち合わせ」は男子が多くなっています。女子は、しつかり目的を持って図書館を使っているようです。男女の性格の違いが、こんなところにも表れました。



【図1】図書館へはどのくらい行きますか

	週1～2日	週3～4日	ほとんど毎日	試験期のみ	月1～2日	その他
男	34.6%	15.7%	7.8%	14.3%	21.5%	6.1%
女	33.1%	11.5%	2.9%	21%	22.8%	8.8%

【図2】館外貸出しについての不満度



### すぐに使える本が少ない

図書館について時々感じることは、「数のわりにすぐに使える本が少ないな」ということです。たとえば、図書館と理学部図書室にある本が、重複していたり（もちろん、両方に置いて欲しいものもあるわけですが）、かなり昔の、今ではあまり使われないような本でも、同じものが何冊もあつたり…という具合に。（物理3 丸山貴美）

### 男は不満派、女は満足派

館外貸出しの冊数・期間・手続きについては、現状に大きな不満がないことがわかりました。ただ、これを男子と女子で比べてみると、いずれの場合も、男子の不満度が女子を上回りました【図2】。

この傾向は、「図書館に必要な本がありますか」という質問の回答にも、ハッキリした形で表れ、「不足している」という人の割合は、男子53.1%に比べ、女子は36.4%という結果が出ています。必要な本についても、女子の場合は、今あるものをできるだけ有効に使おうとするし、男子の方は、自分の目的にピッタリした本でないと利用しない、というような傾向があるのでは？ もっとも、単純に、女子は本を探すのが上手なのかもしれません。いずれにせよ、女子の方が、より現状肯定的と言っていいようです。

※アンケート回答者数：890名(学生総数の12.4%)





### 欲しかった本はこれだ！

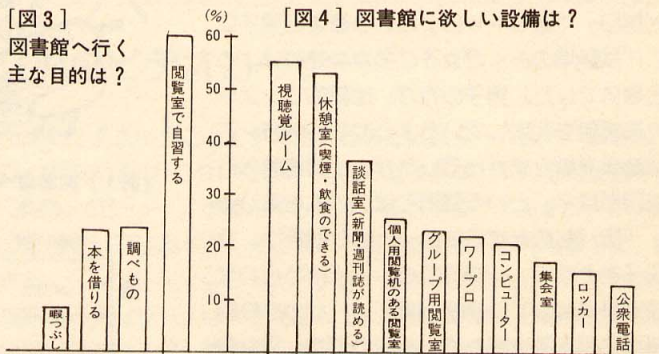
「図書館にどんな本や資料を置いて欲しいですか」という質問に対する回答（複数）は、1位：授業のための参考書（56.4%）、2位：専門書・学術書（54.9%）、3位：ベストセラー・話題の本など（31.9%）、という結果でした。以下4位から8位までは20%台でほとんど差がなく、「時事的な本」「小説などの読み物類」「視聴覚資料」「参考図書」「一般的な週刊誌など」と続きます。

これを学部別に見ると、3位と4位に、それぞれの学部らしい特徴が出ました。経と理の3位は全体の結果と同じですが、法では「時事的な本」、文では「小説などの読み物類」が、3位にあがります。経の4位が「一般的な週刊誌など」、理の4位が「辞書・百科事典などの参考図書」という結果も含めて、「なるほど」と、なんとなくくうなずけるような気がします。

### 本を読むよりビデオが見たい

「図書館へ行く主な目的」[図3]は、このほかに、「待ち合わせ」「涼みに」「新聞を読むため」といろいろ。「閲覧室で自習するため」が60%とダントツで、「本を借りるため」「調べものをするため」がそれぞれ20%強にすぎなかったのは、少々ショックでした。現代の図書館には、多様な機能が要求されているようです。

[図3] 図書館へ行く主な目的は？



[図4] 図書館に欲しい設備は？

「図書館に欲しい設備」[図4]を見ても、この傾向はハッキリします。閲覧室についての希望が、かろうじて4位と5位。「図書館は、本を借りて勉強するだけのところじゃない」というわけでしょうか。

「自習」に疲れたら、「休憩室」でひと休み。もうひとがんばりしたら、「ビデオルーム」でマイケル・ジャクソンでも見るか。それとも、友だちと「談話室」でおしゃべりでも。レポートは、

「ワープロ」で清書。家にちょっと用事ができたら「公衆電話」もあるし……

でも、図書館サービスのいちばんの目的は、やはり「本の利用」にあることも、お忘れなく！

### ピラミッド教室を、開架式図書室に！

図書館に対していちばん強く望むこと、それは、何といても開架式図書室の本を増やしてほしい、ということである。開架式ならば、実際に本を手にとって、どれが自分の役に立つものかを比較検討することができるし、めんどろな手続きが不要になるので、非常に利用しやすい。

そこで提案したいのが、ピラミッド型中央教室を、貸出し専門の開架式図書室に造りかえたらどうかということである。あの建物ならば、位置的には大学の中央にあるし、あれだけのスペースであるから、現在の中央図書館開架式図書室の数倍の収用が可能となる。(法学4 根岸聡彦)

### 暗いなあ……

図書館を利用するのは、年に2度の試験の直前の勉強がメインで、それ以外はクラブの発表のために勉強するくらいです。でも、はっきり言って図書館の各部屋は、みな暗いと思います。勉強をしていても、本を探していても、どうも照明が気になります。天井が高い上に、壁の色が暗いのが原因だと思うのだけど…。(経済3 斉藤兼三)



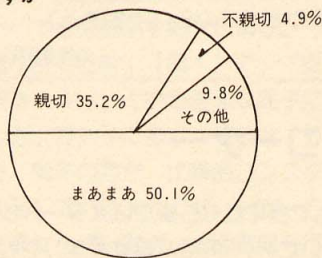
今年から院生は書庫に入れることになったため、図書館の蔵書を詳しく知ることができるようになった。その結果として、閉架式の不便さが痛感される。学部生がカードでしか蔵書を知ることができない現状では、死蔵されている本は少なくないのではあるまいか。とはいえ、開架式にすれば本が盗まれるのは参考室を見れば明らかであり、このジレンマは図書館にとり如何ともしたいだろうが、この図書館自身にカードを引きにくくさせている要素がある。それはカードが2階に設置されていることだ。階段を登

### 図書館改造論

るのは降りることよりも億劫<sup>おっくう</sup>なの。この図書館は設計ミスじゃないかしらな。カードを、1階のロビーへ降ろし、それに合わせてカウンター並びに事務室を1階の閲覧室とトレードしたらどうだろう。もちろんこれには相当な費用がかかる。図書館に金がないことはこちらでも承知している。しかし、それなら、ベストセラーズコーナーなんて設けるなど言いたい。あんな本を買うぐらいなら、講談社の学術文庫でも揃えたほうがよっぽど気が利いている。

(国文専攻 博士前 佐藤 清)

【図5】館員の対応は  
いかがですか



### つめたい図書館員?

85%の人が、館員の態度を、「親切」「まあまあ」と評価してくれました。でも、安心してはいられません。20人に1人が、館員を「不親切」と感じているのですから。また、ひとことでは「まあまあ」であっても、そこにはいろいろなニュアンスが含まれているようです。「親切な人もいるが、不親切な人もいて不愉快」という指摘もありました。「親切だがつめたい感じ」といわれ

ると、「カウンターにすわるのも、むずかしいものだなあ」と考えこまざるをえません。

もしかしたら、皆さんが「自分で探す」のを、「アドバイスしながら手伝う」館員の対応が、「探してくれる」ことを期待している人にとっては、「不親切」と感じられるのかも。ともあれ、これらの指摘を素直に受けとめて、反省の材料にしていきたいと思っています。

図書館の仕事をしている、  
いろいろな本と出会います。  
たとえば、1910年にベルリン

### 蔵書紹介ア・ラ・カルト

でフィッシャー社から出された『ハウプトマン全集』の第1巻には、「Der kaiserlicher Edellsschule in Tokio. Gerhart Hauptmann 1911」と、赤インクの色も鮮やかな著者直筆の署名が見られます。ご本人が学習院に寄贈されたものです。また、わが国最初の和独辞書である『和獨對譯字林』(1877)の初版本を見ると、勝海舟の題字があり、校訂者レーマン(R. Lehmann)の書いた序言には、当時、「英語を学ぶ者にはヘボン(J.C. Hepburn)の辞書があり、これを大いに手本とし独語を修める者に提供する」とあります。この時代の、学問に対する意気込みが伝わってくるようです。これは、複製版が三修社から1981年に出て、国文・独文研究室で購入しています。(ヘボンの辞書については、「来ふらり」6号をお読みください。)

そして、時に、やや大げさに  
いえば「感動的」ともいえ  
る出会いをすることがあります

す。ラーレンツ(K. Larenz)著『Rechts-und Staatsphilosophie der Gegenwart』(現代における法哲学と国家哲学)(Berlin, 1935)がまさにそうです。この本を開くと、ほぼ全頁にわたってアンダーラインが引かれており、鉛筆の書き込みは欄外をびっしり埋めただけでは足りず、巻末の余白にまで及んでいます。故豊崎光衛氏(法学部教授)の寄贈本から成る「豊崎文庫」——1920~30年代にドイツやフランスで出版された法律書が中心——の中の1冊です。整理のため1冊ずつ手にとるたびに、細かな文字を通して、学問やご自身の蔵書に対する先生の態度・姿勢のようなものが伝わってきて、故人のお人柄があらためて惚べれます。

(洋書係 甲斐静子)



## 参考室あれこれ

「博文館文庫版の『春秋左氏伝』を探してほしい」という依頼で調査を開始。本学になし。国会図書館にもない。博文館文庫版と限定されているので、博文館に関する情報がないかと、各種蔵書目録の棚の上から『東京都立日比谷図書館蔵書目録』（1868～1954）を取り出し、書名索引を見ていくと、『博文館発行図書目録』（大橋図書館編）が目にとまった。博文館は大橋図書館と関係があるとわかり、『ふみくらー日本の文庫案内』の索引をひく。「大橋図書館」の項目があり、該当頁を開くと、「大橋図書館」ではなく「三康図書館」となっている。本文には「増上寺と西武鉄道が共同して設立した財団

法人三康文化研究所の附属施設で、昭和39年に完成し、41年から一般に公開されている。蔵書の大部分は、明治期の大手出版社・博文館主の大橋新太郎氏が明治35年に設立した旧大橋図書館（昭和28年閉館）の蔵書を引き継いだもの。雑誌『太陽』『譚海』……などを刊行した博文館の性格を反映し、蔵書の中でも戦前の大衆文芸書1万冊余と約1500種類の雑誌が目立っている」と出ている。『三康図書館蔵書目録』をひくと、たしかに載っていた。

三康図書館に関する知識があれば即答できたケースである。だが、回り道必ずしも無駄ではない。その過程で得たものは次回からの回答に生かされるから（と慰める）。

（参考係 久保田安子）

## 立見のビデオコーナー

「昼休みに気楽に立ち寄ってもらえたら」ということで今年度から新たにスタートした「来ぶらりビデオ」。どんなものを放映すればよいか勝手がわからないため、「内容が堅すぎず、やわらかすぎず」ということで、4・5月は「旅」と「動物」のシリーズを組んでみたが、ふたをあけてみると、多い時で10名前後、少ない時はたった1名の参加者しかなかった。そこで、6月は参加者の意見を参考に、映画・音楽を中心にプログラムを組んでみた。「レット・イット・ビー」は、まあまあ入り、「ティファニーで朝食を」30名前後、6月下旬放映の「スリラー」は40名を越して、30数席準備した椅子が足りなくなる盛況だった。ビデオコーナーの狭いスペースが、画面に引き込まれた学生の熱気でいっぱいという感じで、担当者は圧倒されそうだった。夏休みあけの10月、3階のビデオコーナーをのぞいてみませんか。番組内容その他についてのご意見をお待ちしています。

（和書係 上野しのぶ）

## お知らせ

### ○大学祭の期間中は閉館します

10月31日(水)から11月5日(月)まで、展示会場として使用されますので、閉館します。

### ○「来ぶらりセミナー」に参加しませんか

毎回大好評の「来ぶらりセミナー」。第6回を次の要領で催します。ふるってご参加ください。

外国文献の検索一引用・参照を手がかりに—

日時 10月20日(土) 1時30分～3時30分

会場 大学図書館3階会議室

定員 20名(先着)

会費 300円

申し込み 10月8日(月)より、2階カウンターで受け付けます。

### ○1階開架図書室に特別コーナーを設けます

一般教育教科指定図書コーナー

一般教育の授業を担当していらっしゃる先生がたに指定していただいた、講義と関係の深い本をまとめてあります。

アジア・アフリカコーナー

東南アジアを中心に、政治・経済・宗教・文学など、分野を問わずここに集めます。

来ぶらり No.7 1984年10月1日発行

発行責任者：波多野里望 編集委員：種田昭平 清水裕子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221